

Title	理財学会記事
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.3 (1926. 3) ,p.409(141)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260301-0141">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260301-0141</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

労働との概念を分ち費消労働を以て交換価値決定の唯一の標準としたることは彼が労働力の価値と労働の分量との二つの概念を分別し貨物の交換価値は労働力の価値に依りて決定せられず労働の分量に依りて決定せらるゝものであり、且つ前者は後者より小であることを認識せるに由るものであると説き第四章に於ては「貨物の交換価値はそれが生産に費されたる労働の分量により決定測量せらるゝ」と云ふ命題に於てリカドは此価値形成労働を如何に規定するところがあつたであらうかと云ふ問題を提出し労働を価値の質的規制者としての労働と量的規制者としての労働との二つに分ち前者に關聯してはリカドオは労働の單位を認めたるが其單位の本質を把握するに至らなかつたことを指摘して茲に彼の價值論の未熟なる一因在りとなし後者に關聯してはリ氏が價值論の規制者として認めたるは平均労働分量なりと爲す説と最大労働分量なりと爲す説との二つありとして之を紹介したる後に自らの斷案として前者は價值決定の一般的規定であり後者は其具體的に實現せらるゝ規定の一つの場合であると解答して居らるゝやうである。

猶ほ著者は第五章に於て直接労働と間接労働を第六章に於て相對價值と眞實(絶對)價值を第七章に於て價值の實體と尺度とを論究して居らるゝが、而して是等の諸章特に最後の章の議論は大に賛成を表せんとする所であるが其紹介は茲には之を割愛することゝして、以下第二篇に就て其大要を言へば著者はリカドオの擧げたる固定資本流動資本の區別は其自體に於て缺陷あるのみならず他方に於て不變資本可變資本の區別としても頗る不十分なるものである。彼の價值論の修正は茲に萌芽し、彼の利潤論は茲に發生しその價值論は終に其本體より離れんとするに至つたのであると斯う云ふ見地より所謂リカドオ價值論の内容に立入つて討究せらるゝのであつて其目的の爲めに主題を利潤の相對價值に及ぼす影響と勞賃の相對價值に及ぼす影響とに分ちリカドオの言を引いて詳細に説明し、最後にリ氏は此修正に依りて彼の價值論を放棄するに至りたるものであらうか否か或

者はリ氏は此修正に依りて費消労働の外に利潤をも明らかに價值構成要素として認むるに至つたものであるから修正は眞に修正なりと爲すが併し労働價值論に理解あるものはリ氏は利潤を相對價值變動の獨立の一要素として認めんとしたるは事實ではあるが彼の労働價值論の本質及び所謂修正の内容は利潤を労働價值より説明す可く已に大體に於て可なり十分なる程度に於て構成せられてゐた、たゞ彼は一步を進めて利潤を斯の如く餘剩價值として意識的に説明するに至らなかつたに過ぎないと解するのである、自分は此後者に從ふとして自己の態度を表明して居らるゝ。筆者は著者の此表明に對しては是非を云爲す可き地位に置かれてあらぬから沈黙するの外はないが、リ氏は是等の修正の後に於ても労働價值論を守らんとしたる其形跡は彼の「原論」を讀む者の否定し得ぬ所であるから彼の原論を基礎として議論を立つる限りに於ては著者の此表明に賛成せざるを得ないであらうと思ふ。併し問題は「原論」以外に在りとも云ひ得るのであつて此點は實は筆者の迷ひつゝある所たるのである。

第三篇及び結論の所説に就ては筆者は別に其機會と其人ある可きを思ふて一切觸れぬこととする深く著者と讀者の諒解を請はんとする所である。妄評多罪

(三邊金藏)

理財學會記事 二月九日午後三時より舊演說館に於て理財學會例會を開く。唯物史觀の先驅者なる演題の下に平井教授の講演あり。閉會後萬來舎に於て晚餐會を開く出席者は平井教授並びに二年幹事小林、奥田、野村、武井、血脇、一年幹事、森、塚本、内田、細居、久野にて歡談、數刻八時散會す。